

神々のルーツ・亀岡・元々めぐり

青年研修会にむけて！

青年会企画担当



亀岡市下矢田町鏡岩にある盤栄稲荷宮ゆわさかいなりぐう／晴明神社からみた亀岡市

(大) 国常立尊の都・桑田の宮編

聖師さまは『靈界物語』73巻総説において「富士文庫」に記された天之峯火夫神にはじまる神統譜に言及しておられます。

「富士文庫」とは富士吉田市小明日見村の宮下家に伝わる宮下文書、富士古文書とも称される一群の伝承文書であり、紀元前二一九年、秦の始皇帝の時代に童男童女五百人を含め総勢三千人の集団を引き連れ中国山東半島より渡来した徐福が、富士出麓に鎮座する阿祖山大神宮の神官から見せられた古文書をもとに編纂したものとされています。

この文書に関連してとくに興味深いのは、丹波に神都があったという伝承です。これについてはかつて三浦一郎氏が『大本数学』第14号に「丹波王朝時代と桑田の宮について」という論考を発表しておられます。それによれば、国常立尊は、インドとペルシヤの間にあるマクン州から大陸を横断し、日本海を渡り富士山の噴煙を目当てに日本島に上陸され、のち丹波の真奈井原に神都を築かれこれを「桑田の宮」と移したとのことです。また渡辺長義『探求・幻の富士古文献』によれば、「桑田の宮」の国常立尊は北陸・山陽・山陰の悪神を退治され、善政を敷かれ、四海波静かに治まり給うたとのことでした。

そして、どうやらこの「桑田の宮」は亀岡の出雲大神宮に比定されるのではないかというのが、私が今回の企画を思い立つ

たきつけでもあります。

『新月の光』で聖師さまは亀岡について次のように述べておられます。〈霊界物語（第15巻第19章「第一天国」、第20章「五十世紀」）にある鏡の岩は亀岡のことである。亀岡は亀すなわち鏡の岡。神の岡の意味である。〉ここで祝詞をあげたら、第一天国に入ることが出来るのである（木庭次守編『新月の光』上巻「亀岡は鏡の岩」より抜粋）。

鏡の岩……鏡とは、人の世を映すパッシブな鏡だろうか、あるいは世界の雛型としてのポジティブな型・鑑であろうか。

去る六月二十日と翌二十一日にかけ数名で元々めぐりの下見にでかけた。そこで私たちは思いがけなく「鏡岩」の地名にであつた。（前頁写真）

前述のように「亀岡」が「鏡の岡」「神の岡」である理由は、聖師出現の地であり、教えの根本霊場高熊山が鎮座しているところにあると思うが、興味深いことに亀岡周辺には色々な伝承の地がある。そして、聖師の述べられるように「神儒仏耶」が同根であれば、少なくとも同根たる手がかりや伝承が現存するのではないか。

そのような視点から、私たちは、「物語」と「新月の光」から、伝承としての「桑田の宮・亀岡」に現存する跡を訪ねる元々めぐりを企画しました。みなさまに関心をもっていたいただきたく、以下、現地研修に向けて対話しながらご案内させていただきます。

ちなみに、現地研修では、出雲大神宮、磐栄稻荷宮、生身天満宮、安倍晴明神社、独鈷抛山千手寺、桑田神社などを探訪します。

M・望月 幹巳、H・出口 恒

M 丹波には日本の各宗教のルーツとも言える、「元」となる聖地が多くあると聞きました。まず、元伊勢について教えてください。

H 元伊勢には二種類あります。ひとつは伊勢神宮の内宮に祀られている天照大御神が、元々いらつしやつたところ。それから、外宮の豊受大神が元々いらつしやつたところ。どちらも等しく「元伊勢」と称しています。

M そうなんですか。知りませんでした。そうすると今回のテーマである丹波・桑田の宮の「元々巡り」で関係しているのは、どちらなのですか？ それらを傍証しうるてがかりや伝承が今も亀岡に現存するのでしょうか。

H 丹波には両方の元伊勢があります。

特に天照大御神は、元は宮中に祀られていたのが、最終的に伊勢に遷座するまでの間、適切な遷座地を求めて各地を渡り歩いています。それらの地が皆、元伊勢と称しています。たとえば開祖様が明治三十四年に出修した皇大神社も元伊勢（福知山市大江町）ですね。しかし天皇家と日本の

ルーツに関わるだけに、天皇の氏神である伊勢の元がどこにあったかは大きな問題なんですね。

M なるほど。「元伊勢」と言っても、どういう由緒の元伊勢なのか、しっかり確認しないと本質を見誤ってしまう可能性がありますね。

H そうなんです。

一方の豊受大神は、丹波の国の比沼真奈井から遷座した、ということになっていますが、この「比沼真奈井」を名乗っている神社が複数存在していて、本当はどこであったのか確定していません。元伊勢とは名乗っていませんが、富士文庫によれば富士と並ぶ日本の二大神都のひとつ「桑田の宮」も丹波の真名井原にあったとされます。

M 桑田の宮でお祀りしていた神は？

H 「伊弉諾尊、伊邪那美尊二柱は、国常立尊の神霊をその神都 田羽（丹波の旧名）の真井原に祀り、豊受大神と崇めさせ給う」（富士文庫 神皇紀）とし、国常立尊 即 豊受大神としています。これは最初の伊勢外宮の定義に当てはまります。

M ところで桑田といえば穴太が聖師さまの生誕地ですね。

H 豊受大神ですが、本宮山から峰山の比沼真奈為に行き、そして伊勢の外宮へ遷られた（直接伊勢にいったとする解釈あり）。その遷座の途中、曾我部の郷・宮垣内に一時御旅所

としてご御駐簾になりました。上田家の祖先が天兒屋根命という縁で上田家の邸内にお旅所を定められたといいます。

その祭典中、神霊共進の荒稲の種が櫛の樹の腐り穴へ散り落ち、そこから稲が発生し瑞穂を結びました（穴穂・あなおの里の由来）。当時の祖先は家門の光栄として天照大御神・豊受姫大神を奉祀し神明社（現在 郷神社）として親しく奉仕したとのこと。玉鏡・瑞穂神霊）郷神社は今回、参拝します。

M

いずれにしても、聖師様が「元々の」元伊勢は、本宮山であるとおっしゃっていることだけは確かなようですが、一般的な歴史認識とはかけ離れ過ぎていないでしょうか。

H

実はそうでもないんです。伊勢外宮の宮司は渡会氏ですが、渡会氏は出口氏の分家（その逆と言う伝承もある）なので。

つまり渡会氏は出口氏の分家として、本宮山の真奈井から豊受大神を奉じて伊勢に渡ったと聖師はおっしゃっています。後期伊勢神道の出口延佳（1615～1690）は、外宮に奉仕する社家中でもっとも重要な家格の人であったといえます。

M

なるほど。丹波の出口氏は、古来豊受大神をお祀りする一族であり本宮山から峰山、伊勢まで奉仕していったという

ことですか。(『大本教祖伝』開祖の巻)

H さて、元々めぐりからは少々脱線してしまいました。稲荷宮に焦点を移しましょう。霊界物語第4巻第28章では、「豊受姫神」はやはり稲荷大神である、とされています。

M そうですね。

H 豊国姫神はね、国祖の妻神というだけではないのです。

M 伊邪那岐大神は、黄泉比良坂の戦いの勝利の後に、天照大御神と月読尊を生み給うのですが、最後に、「陰陽の火水を放ち給ひて、豊国姫の身魂を神格化して神素盞鳴尊と名づけ、大海原の司に任じ給ふ」(第10巻第26章)とあります。神素盞鳴尊だけは直接お生みになったわけではなく、豊国姫命の身魂を神格化した、と。

H さらに続けて、「豊国姫命より神格化せる神素盞鳴尊の又の御名を本巻にては国大立命といふ。国大立命は四魂を分ちて、月照彦神、足真彦神、少彦名神、弘子彦神となり、現、神、幽の三界に跨りて神業に参加し給ひつつあることは前巻既に述べたる所なり。」

M ちょ、ちょっと待ってください。すると豊国姫命は神素盞鳴尊であり。

H またの御名、国大立命というわけです。

M つまり、豊国姫命(豊雲野尊) || 神素盞鳴尊 || 国大立命、ということですか。

H 現界における豊受大神が、霊界物語の豊国姫命と相応して

いるとすると、出口の神・豊受大神は瑞霊でしょうね。

M はあ。そういうえぼさつきのお話で、伊勢神道では……。

H はい。豊受大神と天御中主大神は同体です。つまり主神とこのことです。

M なんだか途方もないですね。しかし物語の神観と不思議にも一致しています。従である神が、実は主なる神であった。厳霊を瑞霊が支えているのですが、実は瑞霊が主神である。

H いかがでしょうか。元伊勢の霊的つながりが見えてきましたか。厳霊は神典に出てきます。さらにつなげて行きますと、先ほど私が読み上げた霊界物語の第10巻第26章を思い出してください。「国大立命は四魂を分ちて、月照彦神、足真彦神、少彦名神、弘子彦神となり、現、神、幽の三界に跨りて神業に参加し給ひつつある」。

M それぞれ、霊界物語の霊主体従で活躍した四天使・大八洲彦命、足真彦命、言霊別命、神国別命の後身ですね。

H ええ。かつ、霊界物語中では豊国姫命と国常立尊の四魂が同じとなっております。

M そしてそれぞれが、現界に仏陀、達磨、キリスト、孔子として生まれ、人々を導いたとあります(第6巻第23章)。瑞霊の四魂が、世界宗教の教祖・聖人たちとなって、古代から人類を導いていたのですね。つまり聖師の教えを丹念

に調べていくと、本宮山は世界の宗教の元だと考えることもできるのではないだろうか。

本宮山は太古に素戔嗚尊が出雲から出てこられた時にこの本宮山のうえに、素戔嗚尊の母神である伊邪那美尊をお祀りになった。それを熊野神社と名付けられた。その後素戔嗚尊は紀州方面にご進発になりました。紀州にもまた神宮、本宮、新宮という熊野三社をお祀りになりました。(「昭和」昭和10年11月号「本宮山〈鶴山〉に就いて」素戔嗚尊は熊野大神と書かれている重要な古文獻がありますが、これについては、後日説明いたします。本宮山は熊野三社の元ともされている。

M えっ。ちよつと話が飛びすぎていませんか。

H いやいや。万教同根は聖師様の教えですよ。

霊界物語では、本宮山(桶伏山)はエルサレムから黄金の玉と釜が秘蔵されたという聖地ですから(第6巻第41章)。また伊勢は言霊的にはイスラエルです(『玉鏡』の「三大民族」)。

M 「霊界物語」で描かれるエルサレムは、「イスラエルのエルサレム」を示す場合と「トルコのエルズルム」を示す場合があるようですね。

H 確かにその点には注意しなくてはなりませんね……。特定の場所というより「至聖処」の意味でも使われるよう

です。ところで、豊受大神は稲荷神と同一視されていますよね。

稲荷神は、元々近畿一帯の豪族・秦^{また}氏の祭神なのです。秦氏は丹波とも深い関係があり、丹波への入口・大秦など、地名や古社などが残っています。

M 秦氏ですか。渡来人の一族ですね。

H はい。日本書紀によると、応神天皇(在位270〜310年)の御代に百濟から渡ってきた、とありますが、その他にも出自についてさまざまな説があります。原始キリスト教徒説もあります。渡来の民が居着いた土地というところから、歴史上においても丹波と世界宗教とのつながりは、あながち単なる夢想であるとは思いませんよ。

M なるほど。

秦氏によって、イスラエルの流れが伊勢にまで到達した可能性がある、という推論ですね。

H はい。秦氏は古代の日本の宗教史のあちこちに現れ、仏教・神道を問わず各派の元になる活動をしていました。日本の神社の建築や創建などにも関与していたようです。もちろん伊勢神宮も。今回訪れる元々巡りの聖地にも、深く関わっています。源氏の崇める八幡宮の元、宇佐八幡宮の^{かたし}辛島氏も秦氏の支族です。また元稲荷の盤榮稲荷宮は、秦氏が祀っていた稲荷社でこれが伏見に遷座する元の場合、

とのことですか。

M 盤榮稲荷宮は、いわば元伏見、ということですか。

H 神社の縁起では元稲荷とありますが。この盤榮稲荷宮には、若い頃の安倍晴明が参籠して、稲荷の化身である老人から秘伝を授かった、という伝承もあり、晴明神社もあります。安倍晴明はこの西山の稲荷社に籠って天文暦道を大成したという伝承があります。安倍晴明については、幼名、童子丸として霊界物語に登場しています。

『かの昔語りにとく所の浦島子が亀に乗って、竜宮に往き、乙姫様に玉手箱を授かって持ち帰ったと伝ふる竜宮島も、安部の童子丸がいろいろの神宝や妙術を授けられたといふ竜宮島も亦、古事記などに記載せられたる彦火々出見命が塩土の翁に教へられて、海に落ちたる釣針を捜し出さむと渡りましたる海神の宮も皆此冠島なりと云ひ伝ふる丈あつて、どこともなく、神仙の境に進み入つたる思ひが浮かんで来た。』(物語第38巻第13章より抜粋)

M 安倍晴明はまた稲荷大神の導きにより神力自在の妙術を得て我が国独特の陰陽道を確立。朝廷の祭儀や我が国の暦による生活規範を定めましたね。

H はい。安倍晴明の母は、賀茂氏の出身との説があり、賀茂氏は秦氏と縁戚です。賀茂氏と言え、役小角。

M まだあるのですか。

H 愛宕神社は、賀茂氏の役小角と秦氏の秦泰澄が開きました。

その愛宕神社の勧請元は、亀岡市千歳町の愛宕神社と言われています。

M これまた丹波の出身なんですか。

H そして空海ですね。秦氏は彼の留学や、帰国後の活動を支援しました。稲荷神社は空海の布教とともに広まりました。亀岡市稗田野町には、彼が帰国後最初に開いたという独鈷抛山千手寺があります。帰国の時に港から密教を開くにふさわしい地を選ぶために日本に向かって独鈷(密教の仏具)を投げたところ、この地に着いていた、といえます。

M すると秦氏つながりで、亀岡(園部含む)には元稲荷、元愛宕、元高野がある、ということになりますね。古代日本の主な聖地が勢ぞろいじゃないですか。

H 天満宮の元、生身天満宮もあります。道真が生きていた時の天満宮です。面白い話がありますが、また次の機会です。



生身天満宮

M 今回亀岡近辺で巡る神社としては、元出雲の出雲神社がありましたよね。

H はい。亀岡市千歳町の出雲大神宮です。出雲国の出雲大社は、ここから勧請された、という説もあるくらい由緒のある神社で、そのために元出雲と称されています。

M 出雲と秦氏ですか。

H 亀岡の出雲大神宮は、一名「桑田の宮」と言うかと伝えられています。桑田とは丹波の地名でもあるのですが、これは高い絹織物技術を持った秦氏が、この一帯に桑畑を開いたことに由来している、と言われているのです。

M 秦氏は稲荷神だけでなく、出雲神社も祀っていた。

H 出雲大神宮の宮司さんは「周辺の神社には秦氏が関わる神社が多いけれど、この出雲大神宮は違う」と言われています。「大本も国常立尊をお祀りしているでしょ」とも言われました。

御祭神は大国主命とその后神・三穂津姫命みほつひめのみこととなっています。保津峡の名の起りとなった神様で、前出の富士文庫では素戔嗚尊の一女の出雲姫と書かれています。

しかし古来、御神体として社殿後方の御陰山みかげやまを奉斎していました。そこに鎮まつておられるのは国常立尊くにつたかみであるといふのです。

M 出雲神社が国常立尊を祀っているのですか？

H 出雲大神宮の由緒にはそうありますね。

*由緒

「丹波国桑田郡の式内名神大社。我が国神祇道に正史として伝える国常立尊が丹波の国、或いは亀岡の祭神となつていたものと思われる。

太古において国常立尊は天が下に下り、たにわ「田場」の真伊原にましまして桑田の宮（出雲の宮）を築かれ、国の半分を農業を主にして理想的に統治された。

国常立尊は薨じて後に田羽―田場―出雲御神体山に葬られ、そして出雲毘女皇女らによってその御神体山の麓の祠に祀られる。

この出雲毘女は後に三穂津毘女と諡されて、出雲大神と呼ばれるようになった。」

元伊勢では、真奈井に祀られていた豊受大神が、霊界物語の豊国姫命（豊雲野尊）と相応している、という話がありました。そして元出雲で国常立尊が祀られている。

すると丹波の聖地では元々、大本と同じ神様を祀っていたことになりました。

なるほど。すべてがつながっていますね。すべてが桑田の宮の影響下なのでしょうね。

ところで、元々巡りの起点にして終点である、熊野館なの

ですが。

H 熊野館は言わずと知れた、聖師様晩年のお住まいですが、

戦後の愛善苑発足当時の本部が中矢田農園に置かれ熊野館の隣が事務所でした。熊野館は愛善苑のルーツといえます。

(『大本七十年史』下巻740頁)

熊野館の庭には築山富士と鳴門を象徴する鏡池があります。

M なぜ熊野館はこの場所にあるのですか。

H 熊野館のある亀岡・矢田は、北緯35度00分と、東経135度35分(34分57秒)のほぼ交わる地点にあるんです。北緯35度は三五と「あなない」に通じ、東経は同じく135度35分ですね。縦横に三五の聖数が交わる場所。ご存知のとおり、三五とは瑞の御霊、巖の御霊を意味していますよね。瑞の御霊と巖の御霊を統合した神素彥鳴大神・主神だからこそ、その場所にいることが必要なんでしょうね。

M もう何から何まで至れり尽くせりですね。恐れ入りました。

H 今回は、研修の訪問地の紹介ということで、簡単に概略を説明したに過ぎません。

元伊勢、元出雲、秦氏、元天満、イスラエルと伊勢、これらのテーマを深掘りすれば、まだまだそこには手をつけられていない問題が、たくさん眠っています。

天照大神・熊野大神のお話、大物主のお話などは、期待ください。新たな発見によって、ますます聖師様の世界経綸

についての理解を深めることができるよう、我々は精進して行かなければなりません。ここまでの知見は、その端緒を垣間見たに過ぎないのです。

M ごつついすね。どうもありがとうございます。

H ひとつ気になっていることがあるのですが。亀岡・桑田宮は日本の神々のルーツということでしたのに、綾部は世界の神々のルーツというお話がありましたね。飛躍してしまつて……。

H いずれにせよ亀岡は日本の神々のルーツです。新しくは生長の家、世界救世教など多くの新興宗教のルーツは大本であり、それは亀岡・綾部がはじまりです。綾部が世界の神々のルーツというのは、霊界物語上なのですが、世界宗教と日本神道や日本仏教との関係も興味深いテーマですね。M これはもう少し学びあいながら、今回の記事作りに協力くださった方々の意見もお聞きしながら、テーマをしぼって探究してみたくまりました。

H&M 今後ともよろしく願います。

〈九月に予定される青年会の現地研修は、亀岡、綾部、聖師、主神を中心において準備にも力がはいっているようです。みなさまふるってご参加くださいませ。青年担当役員・目崎〉